

## 「流す涙は美しい」

総園長 宮下 智

H男さん、彼の身体はガチガチだ。まるでロボットが歩くような足取りである。腰が反り返り、胸を突き出し、両肩とも持ち上がって力が入っている。足はO脚気味、足首には常に力が入って反り返っている。そんな彼には、度々手をパンパンと叩き、テレビや壁をガンガン叩き、服を破るパニックがある。それはそれは十年前に比べれば激減しているとはいえ、相も変らぬ姿であると言っている。

彼は365日働いた。作業を休めないのである。牛乳パックリサイクル関係作業に従事しているが、他のメンバーが完全休日である土曜日や日曜日もちろんのこと、果ては年末年始、1月1日元旦さえも休めないのである。「休もうか?」「休んでもいいんだよ」にもパンパン、が作業をしてもパンパンだった。

テレビは、畳の上に正座して見た。大好きな番組は「めざましテレビ」、放映の無い土、日は、他の番組のイレギュラーもあって、さらにパニックは憎悪した。

「どこに行きたいの?」には「名古屋科学博物館」、欠かせないイベントは日本テレビの24時間テレビに、飯田市主催の夏の人形劇カーニバルだった。

高速道路のサービスエリアでは必ずパンレットを集め、誕生日のプレゼントに欲しかった物は、毎年、買っても吹かない「リコーダー」だった。結果として何本ものリコーダーが彼の手元にはあった。

大好きな電車乗りでは、必ず飯田線上り豊橋方面を選んだ。これも不思議な選択だった。だって彼の家は、飯田線下り辰野方面なのだ。まるで反対方向の選択ということになる。

これらの暮らしを自閉症の「こだわり」ということは簡単だ。でもこんな暮らしぶりの中で彼が決して自分らしい暮らしをしていないのではないかという想像力は失ってはならない。だって、そのパニックの多さ、激しさは、こんな自己選択と思えるこだわりだらけの暮らしの中でちっとも減らないからだ。

そして、彼はパニックの後、破いてしまった服を申し訳なさそうに縫い繕うのだ。きっとパニックを起こしてしまった心を自分自身の力でなだめているのではと思う。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

僕らは彼のこのがんじがらめの生活を「学校」という言葉で整理してみる。作業時間は「授業」、テレビは「勉強」、そして目覚ましのように規則正しく暮らしましょう。名古屋科学博物館や人形劇カーニバルは「社会科見学」、そしてリコーダーは「音楽の授業」、24時間テレビは文部省推薦的な優良番組だ。

そう彼は「学校的な価値」に束縛され続け、いつまでも学校的な価値を追い求めて努力を重ね、いつまでもそこを卒業できないでいるのだ。だからその出口のない徒労感や決して好成绩を得ることができない閉塞感や自罰感に打ちのめされ続け、だれにも頼ることができない孤独感で、身体がガッチガッチになっているのだと考えた。閉塞感、自罰感、そして孤独感、それを一人で背負い続け、己の中に閉じ込めるために身体がガチガチになる必要があったのだ。

皆さんも身体を意図的に固くしてみると、自分の気持ちが身体の中に閉じ込められていくのも、他者の感情が、ポジティブ感情もネガティブ感情もともに自分に届かないのがよく実感できると思う。

こうして彼は、ロボットのような身体を手に入れてしまったのだ。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

作業を休めないのには、視覚的情報提供を用いて彼を応援した。カレンダーで土日を休みにして、休むことの必要性を彼に説いた。納得がいかない彼に金曜日に土日分の作業量をこなしてしまうことを提案した。次第にパニックなしで休めるようになって、金曜日に土日分の作業をすることも少なくなった。

その延長で、年末年始やお盆期間も次第にパニックなしで休めるようになった。

正座してテレビを見ている彼に、リクライニングチェアを進めた。椅子が届いても正座の姿はすぐには変わらなかったが、支援職員がそそのかすことで、次第にゆったりと足を伸ばしてテレビを見ることが多くなった。

そして本年、他者に頼れない彼に、頼ってもいい場面、言い換えれば甘えてもいい場面を意図的に設定した。それは入浴と食事場面である。

入浴場面では、彼は一通り自分で全てをこなすことができる。何十年来の姿であるから、本人も支援職員も何の不思議も無しにその姿を認めている。そこへ「背中を流してもらわない?」を導入したのだ。ま

ずは事前相談、「なんかH男さん、やたら入浴長湯だったり、いつまでも身体を洗ったりして、時間がすごくかかっているようなんだけど、なにか躓いていることがあるんじゃないかと思うんだよね。試しに支援職員に背中を流してもらおうということ始めてみたいと思うんだけど、いいかな？」彼は即座に「は・い」と答えた。次は、そのスタイルである。彼はタイルの上に正座して、浴槽からお湯を汲んで身体にかけて石鹸を流しているというのだ。そこで「こちらの椅子にどうぞ、座って身体にお湯をかけない？職員が手伝うよ」と提案した。その誘いにも彼は「は・い」と即答した。

彼の眼には、身体を椅子に座って洗ってもらったりしている重度障害の方々がたくさん映っているはずだ。彼が何を想いながら、一人でタイルの上に正座して、全ての入浴動作を何十年もの間、一人だけで完結させていたのかは、想像するしかないのだが、「できることはできるだけ自分でしなさい」の成長感を背景に、「頼んだら叱られる」「頼んだら嫌われる」「頼んだら良い子ではなくなる」「頼むなんてもっての外だ」「甘えたいなんて言う気持ちを持ちゃいけないんだ」へ突き進んでいたことは、想像に難くない。

また、自分流のシャワーの使い方やシャンプーや石鹸の使い方を叱責された経験もあったのかもしれないし、椅子は障がいの重い方々に譲ってあげなくてははいけないと思ったりしていたのかもしれない。

次に食事場面、彼はなかなか共有スペースで湯沸かしポットやトースターを使うことが難しい。彼なりの使い方があるのが一番の理由なのだが、その使い方を他のメンバーから、あるいは支援職員から制止や制限を受けることが、パニックにつながってしまうからだ。そこでマイ湯沸かしポットとマイトースターを居室に用意して食事をしている。これならお湯を入れるのも、パンを焼くのも自分の思い通りに自分のしたい時間で実施することができる。居室には、職員が食事を運搬する。ただし、インスタントコーヒーとお茶漬けにはお湯が入っていない。もちろんトースターでパンを焼くのは本人だ。

そこで甘える場面の導入だ。インスタントコーヒーやお茶漬けには、支援職員がお湯を入れてから持参することを提案した。高級ホテルのルームサービスのように、お客様、全て準備は終わっています、どうぞお召し上がり下さい状態にして食事提供することを提案したのだ。彼はそれにも「は・い」と答えた。

それらの支援が始まった週末、彼のパニックは無かった。そしてその後も小パンパンはあるものの、収まりも早く行動は激変したのである。



先日、Mさんの葬式が体育館で行われた。87歳、老衰での逝去だった。彼はその席に花を手向けに来た。なかなか体育館を去れない彼だった。そのうちに壁を叩き始めた。え！パニック？でも彼の眼には涙がいつぱいだった。(初めて?)そして何回も何回も不自由な構音で「あ・り・が・と・う」を繰り返しているのだ。特にK男さんとMさんとの間には密な交流はない。所属しているクラスも異なっている。時々アートの時間で一ヶ月に1回、何年か一緒だったくらいが記憶である。

なぜ「ありがとう」だったのかわからなかったが、「そうだよ、ありがとうだね、精一杯生きたものね」と繰り返しながら体育館を出た。

体育館を出て出棺を見送った後も彼は「ありがとう」を繰り返した。そして涙が頬を伝わった。隣を歩きながら、きっと彼は隣を歩く私の手をつなぎたいのではないかと思った。でもちょっと私は意地悪をしたくなった。意図的にこちらから手をつながないようにして、彼から手をつなぎに来るか試しにかかったのだ。掌を彼に向けて、しばらく隣を歩く。すると何のためらいもなく彼は彼から私の手を握ったのだ。彼の手はとても暖かく柔らかかった。



人生の豊かさって何だろうと思う。「学校的な価値」に縛られながら、がんじがらめの固くギュッとしまった心と身体で生きていくよりも、明らかに葬式で心を乱されながら、涙をこぼし、「ありがとう」と繰り返す柔らかな心と身体で生きていくほうが豊かな人生なんだと思う。

「あ・り・が・と・う」、それはきっとすでに亡くなっている彼のお父さんやお母さんにあてたものではなかったのではないかと、今では密かに思っている。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp/>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1/>